
俺と神様と異世界旅行記

落花生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と神様と異世界旅行記

【Nコード】

N7287P

【作者名】

落花生

【あらすじ】

世界に弾かれ異世界を旅することになった存在、真田幸人。世界に歪まされた彼は何処にゆくのか・・・

この小説(?)にはアンチや原作ブレイク、チート等が含まれております。その手のものが苦手な方は戻るボタンをお願いします。それでもいいという方はご覧ください。

プロローグ（前書き）

警告！ この小説は駄目作者の曖昧な原作知識と限り無く低い表現力、文章能力で出来ております。途中で途切れてしまうかもしれません。それでも見てもいいという方は（苦笑）で御覧ください。

プロローグ

？「此処、何処？」

白、白、白

気が付くと辺り一面、白い世界。なぜか痛む頭。そして、目の前には白いローブを着たFateのイリヤ

？（何この状況、なんで俺こんなところにいんだ？）

イリヤ？「それは僕が君を連れてきたからだよ♪真田幸人君♪」

幸人「!？（俺、口に出してたか？しかし、俺は一体何故？）

イリヤ？「君は何も喋ってないよ♪僕が君の考えを覗いただけ。状況は・・・って君、何も覚えてないの？じゃあ思い出させてあげるよ♪ついでに説明もね♪」

イリヤっぽい少女はそう言うと、俺の頭に手をかざす。それと同時に、頭の中に何かが映像が流れ込む・・・ってこれは・・・

幸人「・・・ということか」

イリヤ? 「ということだよ」

何？状況がわからないって？仕方ないな簡単に説明するなら。

- ・子供を助けて車に轢かれた
- ・目の前のイリヤ？は天照大御神って神らしい
- ・そして俺はこの幼女（天照）に拾われその暇潰しに付き合わされるらしい・・・

幸人「ってことはあれか？異世界に転生ってやつか？幼女」

幼女（天照）「もちろんですよ♪てか僕天照って名乗ったよね？なんで幼女って呼ぶの！？しかも表記も幼女だし！？」

幸人「いいじゃないか別に。可愛いと思うぞ？」

幼女であることが悪いことだろうか

いや、悪い訳がない。可愛いは正義だ

幼女「そんなの訊いてないよ／／／（可愛いって言われちゃった／／／）」

幸人「だが、事実だろう？」

幼女「君、死ぬ前に鈍感とかたらしって言われたこと無い？」

幸人「いや、無いな。ため息をつかれたのはよくあったが」

幼女「はぁ・・・（真性の鈍感だね・・・）まあ、いっか。とりあえず色んなところに飛んでもらうから♪」

幸人「色んなところ？原作ブレイクは？」

幼女「いいよ♪」

幸人「チートは？」

幼女「最初からはダメ。あと魔法の無い世界での魔法とかもリミッター掛けるから♪」

幸人「あー、わかる気がする」

幼女「でしょ？僕は成長してるところが見たいんだよ。下手に最初から俺tueeeeとか見てもつまんないし？」

幸人「最初からじゃなきゃいいんだろ？」

幼女「そうそう、それさえ守ってくれば7個までならいいよ♪」

幸人「守んなかったら？」

幼女「1個だけ。しかも王の財宝の宝具無し限定で死亡フラグ乱立してる世界に強制転移♪」

幸人「最初から詰んでるじゃないか」

幼女「いいじゃないそれはそれで♪・・・で能力はどうするの？」

幸人「ん・・・そうだな、じゃあ・・・

- ・身体能力の成長限界を無くす
- ・不老不死（限定的な）
- ・色々な才能（天才を少し下回る程度）

・あらゆるマンガやゲームに出る技、魔法の知識（努力次第で使用可能）

・リリなのデバイスが欲しい（インテリジェントかユニゾンのどちらか）

・あらゆるマンガやゲームの武具を造れるアーティファクトが欲しい（造れるのは一度に一つ、完成度はオリジナルと同じだが特殊能力は無し）

ってところだな」

幼女「結構控えめだね、才能とか『1万年に1人しか出ない天才』みたいなのもよかったのに」

幸人「才能だけバカみたいに高くてもしょうがないだろ、才能に振り回されて終わりだな。それに・・・」

幼女「それに？」

幸人「努力で天才打ち負かす方が楽しいじゃないか（ニコッ）」

幼女「!？　そ・そうだね／／（綺麗な笑顔／／見ててドキドキしちゃった／／／／）」

幸人「だろ？」

幼女「・・・あ、そ・そうだ。そういえば限定的な不老不死とデバイスの設定はどうするの？」

幸人「ああ、そうだな。限定的な不老不死は毒とかでは死なないようにする。デバイスはインテリジェントは戦闘補助メインでユニゾンは・・・まあ好きにしてくれ、人格も任せた。」

幼女「わかったよ♪じゃあ次は君の見た目だn」幼女が決めていいぞ、酷くなければどこ変えても文句は言わない」・・・君結構丸投げ多いよね」

幼女はプクツと頬を膨らませて睨んでくる。だが幼女よ、んなことしても微笑ましくみえるだけだぞ？それに・・・

幸人「俺にはあまり美的センスは無いんだ。だから異世界に飛ばすときにでも変えといてくれ」

幼女「仕方ないなあ・・・あ、じゃあデバイスとか能力も一緒に送っておくからね？」

幸人「ああ、他に決めることなんてあるか？」

幼女「うーん、今はないかな？じゃあそろそろ行こっか♪此処に戻すのはこっちの判断で決めるから君は行く世界で思うままに頑張っ
てね♪」

幸人「ああ、そうさせてもらうよ。ああ、あと余った願いは今は保留にしてくれないか？今決めても構わなくはないんだが」

幼女「保留ね？わかったよ言うのはいつでも構わないよ♪暫くは君の旅を観ていられるしね♪」

そういえばずっと幼女呼びだったな。ずっとこのままもなんだしいい加減直すか

幸人「そうか。じゃあ飛ばしてくれ天照」

天照「う・・うん／＼／＼まずは真・恋姫十無双の世界に飛ばすよ？
（初めて名前で呼んでもらえた／＼幸人に言われるとドキドキしち
やうよお／

／＼」

幸人「恋姫か・・。よし、天照頼む」

天照「ひ・・ひゃい！行くよー！せーのお！！」

天照が掛け声と同時にどこからか垂れ下がる紐を引くと

「ガコンッ」

俺の立つ部分が黒く開き落ちていく俺

幸人「うおわあああああ！！？」

天照「が・・って・ー！幸人おー！！」

天照が何かを言っていたような気がしたが俺の耳には完全に届かず。
そして俺の意識は薄れてこの空間から消えた

Side 三人称

幸人を恋姫の世界に飛ばした後も天照はそこに佇み、幸人のいた場
所を見つめる。其処からはほんの僅かにだが黒い煙が揺らいでいる。

天照「やっぱり出てる・・。よっぽど幸人の歪みが酷かったんだね・
・。普通の人間なら自分に起きてる出来事に驚いたりする筈なのに・
・。」

彼に手をかざしたときに流れ込んだ彼の一部、それを見た天照は驚愕した。それは彼の存在の構成。それは・・・

天照「幻想無き世界における唯一の幻想にして存在すべきではない存在」

人の想い描く夢、ある筈の無いものを在って欲しいと願う心。

存在そのものが幻想であり幻想なき世界における矛盾。

人に願われ世界に否定されるモノに在らざる幻想^{モノ}

彼は『非現実を現実と捉える』ところを世界はそれに『非現実を非現実として捉えなければならぬ』という認識をかけ、彼の存在を歪ませ、彼の人格を殺していった。

天照「そして世界に殺され此処に流れ着いた・・・か・・・」

天照は幸人に『子供を助けて車に轢かれた』と説明したが実際は違い、幸人は『世界に弾かれ世界から存在そのものを消された』のだ。天照は世界から弾き出され世界と世界の狭間を漂う幸人を見つけ、暇潰し等ではなく純粋な優しさで助けたのだ。異世界に飛ばしたのは幻想の世界なら幸人も拒絶されまいと考えたため。能力を与えたのは今まで辛かった分異世界で楽しく過ごして欲しいと願ったため。そして天照は彼の人格に触れ、彼に好意を抱き彼を支えたいと願った。

天照「あんな人だからこそもっと・・・ずっと生きていて欲しい。幸人とならずっと一緒でも良いかもしれないな♪」

トリップする天照。まだプロローグの筈なのにもう1人落とすとか・・・此処に居ないけど幸人、恐ろしい子・・・！ってかすることあ

るのでわ・・・？

天照「あ！そうだった。幸人の能力忘れてた！」

思い出した天照は手を薄く光らせ作業を始める

天照「（上手くできたら幸人褒めてくれるかな♪）デバイスは・・・でいっか。アーティファクトもできた。後は送るだけだけど、ただ送るのもつまらないしなあ。うーん・・・あ、そうだ！ふふ・・・待っててね幸人♪」

ニヤリと見た目に合わない妖しい笑みを浮かべる天照。何かを呟くと天照の体から球形の光が現れ、2、3度点滅すると天照の前から消え去り、それを確認した天照も空間から消え去った

S i d e o u t

プロローグ（後書き）

落花生「えーっと、まずは『その1』どうでしたでしょうか」

幸人「いきなりそんなこと言っても誰もわからんだろうバカ作者。
あ、俺は主人公の真田幸人です」

天照「僕もそう思うなあ・・・一回目なんだからもっとしっかりして
よPちゃん♪　僕はヒロイン（？）　の天照大御神です！よろしくね♪」

落花生「やかましいわあ！こっちはもういっぱいいっぱいなんだよ
！投稿一発目で心が折れそうになつとるんじゃボケエ！！てかPち
ゃんてなんだよ！？新米作家（？）の落花生ですよろしくお願い致
しますですハイ」

幸人・天照「それだけ言えれば大丈夫だと思うぞ？（思うなあ）」

天照「Pちゃんは落花生↓ピーナッツ↓Pちゃんからだよ♪」

落花生「そうかいそうかい。アー、ゲフンゲフン・・・よし、じゃ
あ気を取り直して後書きを始めましょう」

幸人「そうだな、そうしよう、そうでないと絶対お前收拾つけられ
ないだろ・・・」

落花生「H A H A H A わかってるじゃないか幸人君やW W」

幸人「うわ、なんかイラッときた」

天照「まあまあ落ち着いて幸人、まだ始まったばかりなんだからね？」

落花生「そうそう、だから落ち着けてww」

幸人・天照「お前（君）は黙ってろ（て）！！」

落花生「サーセンwwいやまじ悪かったからその椅子を下ろして」

幸人「チッ」

落花生「いや、舌打ちしないでよ。マジで悪かったからさ」

幸人「仕方ないな」

天照「そういえば聞きたいんだけど、僕、最初にヒロイン（？）って名乗ったけど大丈夫なの？というかなって良いの？」

落花生「ああ、それは全く問題ない。最初からこんなの良くね？みたいな感じで考えてたし、天照のキャラは『その1』の時点で俺のお気に入り化してるから無問題だ」

幸人「おいおい、良いのか？そんな適当でだい（幸人）ん？どうした天照」

天照「そんなに僕のこと、嫌い？」

落花生（おお、上目遣い＋涙目とかもうこれ卑怯だな（汗））

幸人「い、いや嫌いじゃないぞ」

天照「ホント？」

幸人「あ、ああ本当だ」

天照「じゃあ、ギュッてして？」

幸人「えっ？」

天照「イヤ？」

幸人「えっ、あつ、イヤじゃn・・・じゃなくて・・・あー！もう仕方ない！」

幸人、天照を抱き締める・・・

落花生「・・・といったところでそろそろ終わりにさせていただきたいと思います（汗）次回は幸人と天照の紹介にしたいなと予定しております。

感想、意見その他諸々お待ちしております！それではまたお会い致しましょう！」

プロローグB（前書き）

幸人「前回の後書き見て思った」

落花生「何さ」

幸人「後書きなのに異常に長くないか？」

落花生「ああ、それ？そんなの投稿した直後に思ったわ」

幸人「なら、直せ。今回から」

落花生「当たり前だ。・・・ということで『その2』どうぞ」

天照「あれ？僕の出番は？」

プロローグB

Side 三人称

幸人「ん・・・む？　どういうことだ？　さっきのところが変わらんぞ？」

幸人が驚くのも無理は無い、落ちたときには直ぐに恋姫の世界に行くのかとも思ったし、力をつけるのだって赤ん坊からやり直すのかと考えてたからだ。

幸人「これは・・・あれか？　新しい体に慣れるためのチュートリアル的な何かなのか？　視線がなんか低い気がするし」

天照「その通りだよ♪決して無理矢理話をつなぐ為じゃn「おいコラ、メタ発言止めろ」もう遅いよ♪しかもそれもメタ発言だし♪」

幸人「ハア・・・まあ、仕方ないか・・・でなにするんだ？　一体」

天照「もちろん基礎からみっちり鍛え上げるんだよ♪あ、これが今の君の姿ね♪」

天照が指を鳴らすと何処からともなく姿見が現れる。それに映る幸人の姿は

幸人「何故こうなった」

白い長髪に赤目のお転婆そうな雰囲気的女性だった

天照「イリヤの母親のアイリスフィールにしてみました♪性別は・
・どっちでもイけます♪」

※天照の姿はイリヤです

幸人「なにそれ、『イけます』って、かなり不安なんだけど。てか
その前に・・・鍛える？」

幸人はふとあることに気付く

幸人「あれ・・・？　というか修行して強くなった後に異世界に飛ん
でも色々という意味がないような・・・」「そこは問題ないよ♪」どうい
うことだ？」

天照「他人から見えてじゃなく、僕から見えて君が成長してるのを見れ
ればいいんだよ！！」

幸人「間違っでは無いんだろぅけどなんか『最初からチートはダメ
じゃ無かったの？』って聴こえるんだけど・・・」

天照「気のせいだよ♪」

幸人「いや、絶対きこえr「じゃあネギま！の別荘（1秒が1年v
er）で10分、中の600年分行ってこようか♪」いや、待って
！？」

天照「反論は認めません♪あ、そっちでは僕の弟に鍛えてもらって
ね♪因みに分身を通して僕も見てるから安心してね♪」

【パキンッ】

天照が指を鳴らすと幸人はいつの間にか創られていた魔法球の中に
転移する

天照「さてさて、どうなるのかな？」

S i d e o u t

Side 幸人

どうも、幸人です。とうとう600年経ちやっと出られることになりました。それではこれまでの経緯を日記風にお送りします。ではどうぞ。

別荘生活1日目

いきなり天照に別荘に送られた。600年は流石に長すぎじゃない？とか思った。修行が終わったら軽い仕返しをしてやろうと心に誓う。

とりあえず思わなければならないことは全部思った筈なので辺りを見渡すと北（暫定的に）に森、南と東は海、西に山。

恐らく中央の此処は草原と家が1つだけ、そして目の前には某赤い弓兵がいた。名前は月読命つぐよみのみことという天照の弟らしい。どうやら俺の師匠をかって出てくれたようだ。

俺が「天照、月読ときたら須佐之男すさのをも来るんですか？」と訊くと苦笑いしながら「あいつは今、姉さん（天照）にお仕置きされて書類の山と闘ってるだろう」と答えてくれた。

因みに須佐之男の外見は某大英雄のようだ、ただし狂化はしていないらしい。

いくらか話したあと今日は色々あって疲れたろうと月読さんに食事をご馳走になった。美味かった。流石弓兵と言うべきなのか。そう思いながら俺は用意されたベッドで眠りについた。

あ、因みに性別は自由に変えられた。見た目は変わらず色々と出来

たり無くなったりした。

別荘生活2日目

月読さんとの修行が始まった。

と言っても最初は体力づくりと筋トレだけ。なのだが、月読さんは疲労を魔術で癒し、筋肉痛等は俺が不老なのを良いことに俺の体の時間を早めて超回復を過剰に促進させてくるためたった2時間でもとは50kg位の握力が100kg位にまで強くなった。しばらくその繰り返しが続き昼になる。昼食を月読さんが作ってくれた、やっぱり美味かった。午後も体力づくりと筋トレのみで終わった。

別荘生活1年目

月読さんとの修行が始まりはや1年。

今のところ、この某サイヤ人の様な修行のせいか片手で岩を握り潰す位はできるようになった。

今日から戦い方の修行に入るらしい、月読さんが様々な種類の武器を出す。とりあえず才能はあるからあとは使いたい武器を探してみ、だそうだ。まず、最もポピュラーな刀身75cmほどの長剣に手を伸ばす。悪くは無い。長剣は使えておいて損はしないだろう。他のものにも手を伸ばしてみたいと思ったのはこの位だった。

1、長剣

2、銃系統

3、関節剣（鞭と剣を合わせたもの）例 BLEACHの恋次の蛇尾丸、戦国BASARAの竹中半兵衛の武器

4、大太刀（刀身が90cm以上の刀）例 F F V I I のセフィ
ロスの正宗、ネギま！の桜崎刹那の夕風など

5、ダブルセイバー（長い柄の両端に刃をつけたもの）例 ファ
ンタシースターシリーズより

6、二槍（槍で二刀流）例 戦国B A S A R Aの幸村、F a t e
Zeroのデイルムツド等

変わった武器が多いねと苦笑いされた、自分でもそう思った。

剣と銃はまあ普通だな位でダブルセイバーとか関節剣は流石に無い
とは思った。

選んだ後は早速練習に入る。やってみて思った。

『とんでもなく難しい』剣、銃、大太刀はまだ良かったのだが・・・
がしかし。

関節剣↓上手く振るえず体に巻き付き斬れそうになる。

ダブルセイバー↓手前の刃に気がいかず斬れそうになる。

二槍↓片方の槍にしか気がいかずもう片方の槍が要らない子に。

という結果になった、泣きたくなった。才能が有っても努力しなき
や意味がないと痛感した。

とりあえず頑張ればできるようになる筈なので、『めげない』を目
標にしたいと思う。

別荘生活2年目

武器は最初よりましになったがまだまだ拙い。

今まで師匠（武器を扱いはじめてからこう呼べと言われた）が忘れ
ていたらしい魔法の修行と拳法の修行（覚えて損はしないらしい）
を始めるようになった。その時にインテリジェントデバイスも渡さ
れた（性別？は女性でおとなしい）名前は桜にした。理由はもう今
更言うまでも無い気がする。魔法は基礎知識が既にあるため後は練

習あるのみだ。しかし、基礎体力づくりに武器の扱い、魔法の練習までくると流石に1つに取れる時間が少ない。

・・・が、まあ時間だけはかなりあるので問題は無いはずだ。

別荘生活100年目

大分時間が飛んだが特に何も無かったので省略する。

武器や魔法は俺的にはかなりのレベルになっていると思う。ということとそれを察したのか今度は師匠と模擬戦をすることになった。

師匠は必ず俺を少し上回る位の強さで戦ってる。半端なく強い、師匠は二流の極みと一流の極みを両方扱えて、わざと隙をつくり敢えてそこを狙わせカウンターで叩く。流石見た目赤い弓兵と言うべきなのだろうか。しかも隙をつくらず鋭く速く尚且つ重いという理不尽な強さも出せる。剣で言うなら赤い弓兵の強かさと騎士王や暗殺者らしくない侍の強さを持っている。

まあ、様は全てにおいてチートということだ。たまに師匠を驚かせるくらいの成長を見せるとおお！良いじゃないか！とか言いながら倍の強さで殲滅しようとしてくる。攻撃の威力も数も桁違いになり、それで360度上下左右から弾幕を張ってくる。あれはトラウマになりかけた・・・。

正直かなりきついが強くなっているのがはっきりとわかる。そして師匠の底が見えない強さも理解できる。多分師匠が本気なら俺など秒も掛からないだろう。とりあえず俺の目標の中に『師匠に本気を出させる』と加えた。

別荘生活300年目

やっと半分経った。100年目の時の目標に『師匠に本気を出させる』と加えたが間違いだった。師匠は今でも成長している。俺が予想外の動きをする度にそれを糧とし、更に強くなる。正直この人に勝てる人はいない気がする、普通神様はその強大な能力を転生やらチート能力やらに奮うのだろうが師匠は自身の成長、俺の成長に使っている。・・・勝てる気がしない。強さでも人としても。ならばこそ俺はあの人を目標とし、あの背中に追い付こう。高すぎる背中だが目指すものでは最高峰。だからこそ俺は『師匠の本気に勝つ』を目標にしようと思う。

別荘生活600年目

そしてやっと今に至る。永かった、しかし楽しかった。この600年の間に戦闘狂になってしまったのだろうか。そして師匠との修行生活最後の今日はやはり師匠との模擬戦だった今日は敢えて本気で戦うと言ってくれた、ならば俺もそれに全力で答えるまでだ。アーティファクトを二槍に変え構える。師匠は長剣を創り脇に構える、俺と師匠の間は5m程。どうやら一発勝負の様だ。隙を見せず俺と師匠は構え続ける。

月読「ハアッ!!!」

師匠が突如として強大な気迫を俺に叩き込んでくる。

幸人「グウッ!?!」

思わず怯んでしまう・・・しまった!と思うときには師匠は目の前ま

で距離を詰めており右手で剣を振るってくる。

幸人「チィッ」

俺はどうか左の槍で防ぎ右の槍で突いて反撃するが

月読「甘いッ！」

師匠は体を捻ってかわし、空いた左手で掌底を俺の胴に打ち込んでくる

幸人「ガッ・・・！！」

信じられない威力に俺の体内から空気が叩き出され怯んだ瞬間を・

月読「これで詰みだ」

右手の剣を俺の首に突き付ける。負けた、俺に驕りは無かった。ただ師匠の気迫、体の運用が凄まじかったのだ。

幸人「ハアッ・・・ハアッ・・・」

月読「ははっ一撃目で決まると思ったんだけどなあ、凄いじゃないか」

幸人「よく言いますね、絶対読んでたでしょ」

月読「わかる？でもあの気迫位は耐えて欲しかったなあ」

幸人「あんなの耐えられる奴居るわけ無いじゃないですか。大抵の

奴ならあれだけで死ねますよ」

月読「いやいや、結構居るよ？姉さんとか須佐之男君は余裕で耐えられるよ？他所ならゼウス爺さんとオーディン君がギリギリいける位かな？」

幸人「最高神ばっかじゃないですか！！てか天照と須佐之男どんだけ強いんです！？」

月読「姉さんも須佐之男君も元々僕より強いんだよ。二人とも僕より有名だからね、でも僕は有名じゃない分努力したんだ。だから力なら僕は負けないよ」

やっぱこの人最強だ・・・てか他の神話の最高神より強いって何それこわい。神の次元でのチートじゃないか？

幸人「師匠ってもしかなくても最強？」

月読「それはわからないよ、基本的にそれを確かめる様なことにはならないし。でも、なるんだったらやっぱ最強になりたいよね」

まあ、確かにそんなことになったら神同士の戦争だからな

幸人「でも師匠が負ける姿がどう考えても浮かばないんですけど」

最高神より強いくせに更に強くなろうとしてる師匠が負けるのはとても思えない

月読「良い弟子にそこまで言ってもらえると僕もそんな気になれるなあ」

幸人「って言っても俺は全然まだまだですけどね」

600年位じゃどうやっても師匠の足下にも及ばない訳だし

月読「いやいや、幸人君がまだまだだったら他はもっと酷くなるからね。大体幸人君は神速戦闘の域に入りかけてるだろう？その時点で少し神の域に入ってるんだ、たった600年でだよ？時間を考えれば十分過ぎる位さ」

神速は光を越えた速さのことで師匠や天照のような認知度の高い神は大抵至れる

幸人「そうなんですかね？」

確かに俺は身体強化の重ねがけをすれば光速を少しだが越えられるがその程度ではやはりまだまだだと思う。大体師匠は普通に神速になれる。

月読「そうだよ（600年も普通の人間の力に触れてなくちゃ強さの価値観も変わっちゃうか、幸人君の見方はもう僕ら神と同じかちよっと下位だね）考えてもみてよ、普通の人間が身体強化なしで光速に至れるかい？」

幸人「いや・・・出来ないですね」

考えてみれば確かにそうだ。幾らチート転生者でも光速戦闘を出来るってのは見たことが無い。それを思ってみると・・・

幸人「あれ？俺もしかしくなくても人外？」

月読「少なくとも人ではないね。神格は無いけど力は僕ら上位の神みたいなものかな？」

幸人「理解した途端になんかなきたくなりましたorz」

実は知らないうちに自分が人外になってるとか無いわ

月読「ドンマイだよ幸人君、大丈夫だよ。そのおかげで僕ら位の神が出ない限り死なないじゃない。しかもそんな敵は滅多に出ないし」

幸人「な・なんかありがとうございます！師匠！！」

師匠の優しさに惚れそうだ。今は女の状態だし全然なにやっても問題ない気がする。

月読「いやいや僕も不用意なこと言っちゃったし「師匠！お願いがあります！」なんだい？幸人君」

幸人「今日で修行も終わりなんで餞別ってことでおr・・・いや、私と仮契約して下さい！」

月読「ふむふむ・・・仮契約かあ。うん、構わないよ。君のおかげで僕の新しい可能性が見えた気がするし、これはそのお礼って事で」

そういうことで俺は師匠と仮契約（主は当然師匠）をした、もちろん血の交換等ではなくキスでだ。

師匠程の人ならファーストあげても問題ない気がした。後悔はして

ない。因みにカードは

特性…幻想

方位…北

色調…白と黒の二色

星辰性…木星

数字…0

形在る幻想^{ゆめ}

という感じだった、よくわからないがまあ良いだろう。とりあえず
アーティファクトを出してみよう

幸人「出でよ（アダアット）」

出てきたのは赤い勾玉。と同時に辺りの風景が変わる。・・・なに
これ？

月読「ん・・・その勾玉」

幸人「これですか？」

月読「僕が昔作った奴だね」

幸人「え？・・・」

月読「確かあの時はNARUTOに出てくる幻術の月読を元に作っ
たんだよ、でも幻術世界じゃなくて現実世界に置き換えてみたんだ
ったかな？」

師匠の話が事実なら時間、空間、質量を支配する空間を現実世界に

作り出すって・・・これって・・・

幸人「固有結界？」

月読「に似たものだね、固有結界の中と現実の時間は同じだから、時間を支配する時点でもう別物かな？」

固有結界は魔法に限りなく近い魔術。世界に己の心象風景を侵食させる禁術。しかも幻術の月読の様に幻術世界で精神にダメージを与えるのではなく現実世界で肉体にダメージを与える・・・つまりは

幸人「本物のバグアイテムか」

月読「そうなるかな、時間制限は掛けてあるはずだけどね。確か72時間位だったかな？使った後は24時間使えなくしてる筈。そうしないと流石に不味いでしょ色々」と

時間制限が無ければ何時までも相手を一方的にフルボッコに出来るというバグアイテムだ。まあ、それでも72時間でも十分バグアイテムだけど

幸人「使うような相手は居ないと思いますがね」

月読「はは、それはしょうがないかな。あ、因みに名前はそのまま『月読の勾玉』だから」

幸人「安直過ぎませんか？」

月読「良いじゃないか、なんとなく創ったんだし」

はは、と笑う師匠。ずっと出しておいてもしょうがないので勾玉をしまう。ん？なにか忘れてるような？

幸人「あ、そう言えば」

月読「なんだい？」

幸人「今まで忘れてましたけど。天照は？見てたんですよね？」

月読「ん・・・そうだね、見てると思うよ。・・・そうでしょ！姉さん！「もちろんだよ月君」ね？」

師匠が大声で呼ぶと魔方陣から出てくる天照。

天照「君にとっては久し振りかな？幸人♪」

そりゃそうだこっちは600年、そっちはたったの10分だ。久し振りにも程がある

幸人「そうだな、久し振りだな天照」

月読「僕も久し振りと言うべきかな？姉さん」

天照「そうだね、月君。それにしてもびっくりしたよ、幸人こんなに強くなってるんだもの。しかも月君と仮契約までしちゃうなんて♪」

幸人「い、いや、あの・・・それはだな・・・その・・・」

思い返すと中々恥ずかしい。師匠は互いの血を交換する方法をとろ

うとしていたが私が無理矢理キスをして契約をした。今もう一度やれと言われたら恥ずかしさで死にたくなる。

天照「月君としたなら僕ともやろう♪」

幸人「ちょっと待って、なんかおかs「問答無用♪」ムグッ!？」

いきなり唇をふさがれる。端から見たら見た目姉と妹がキスをしている様にしか見えない。しかも師匠は右手にビデオカメラ、左手はサムズアップ。

幸人（師匠おおおおおおお!!!!!!!!）

天照「んっ・・・ちゅっ・・・ぷはっ・・・」

幸人（なにこの状況、誰か助けてえええ!!!!!!）

この軽い羞恥プレイは数分続き、俺はやっと解放される。

幸人「はぁ・・・はぁ・・・」

天照「にゅふふふ（幸人の柔らかかった♪）」

息を継いでいる俺と顔を紅くして妖しく笑いながらトリップしてる
天照

月読「ほら、幸人君。カードだよ。」

カードを師匠から受け取り早速アーティファクトを出す。・・・今度は腕輪？

天照「僕が創った奴だね」

幸人「またですか」

天照「名前は『極光』壊すことも癒すことも出来る光を放つんだっ
たかな？後は太陽光を吸収して『力』に変えるチートアイテムだよ
♪」

幸人「やり過ぎって言葉を知ってます？」

天照「知らないかな？」

幸人「はあ、今更か。・・・で何しに来たんです？」

天照「ちよっと？扱い酷くないかな？大体君と月君が呼んだんでし
よ？」

幸人「そう言えばそうですね」

月読「来ていきなり幸人君とキスだからね。僕もすっかり忘れてた
よ」

天照「二人ともちよっと酷くないかな？僕が此处に着た理由は幸人
は大体わかるでしょ？」

幸人「そろそろ行くのか？」

天照「うん」

幸人「そっか、じゃあ準備しないと」「はは、もう荷造りは済ましておいたよ幸人君」ありがとうございます、師匠」

月読「準備といっても千変と仮契約のカードに食糧位だから気にしなくていいよ」

と言いながらリュックサックを渡してくる師匠。

因みに千変は私が始めに願ったアーティファクトだ。決してヘカテーとかベルペオルとかは関係ない。

天照「月君が用意してくれたからもう行けるね？」

幸人「ああ、大丈夫。・・・魔法とかはそっちで制限を掛けるんだろう？」

天照「うん、あと今の君の能力じゃ色々と不味いからそっちにも制限掛けるからそのつもりでいてね」

幸人「それはしょうがない。うん」

向こうで光の速さに着いてこれる奴が居たら逆に凄いよ。多分そいつは少なくとも人ではない。

天照「じゃあ、行ってらっしゃい♪」

天照が指を鳴らすと私の足下に魔方陣が展開され、私は転移した

プロローグB（後書き）

落花生「すいませんでしたああああ!!」

幸人「まあ、当然だね、普通2話目位なら連投出来るくらい話作るべきだろうに。行き当たりばったりすぎでしょ」

落花生「反省してる、後悔もしてる。だが話がうまく進まない。」

幸人「それはもう頑張れとしか言えないね・・・」

落花生「反省といったら僕の書くものって無駄話が長いんですよ」

幸人「気の赴くまま書いてっいたらいつの間にか何故こうなった?だもんね」

落花生「正に今の状況なんだよ」

幸人「じゃあ今度から短く簡潔に」

落花生「ok、じゃあほんとに次の話は幸人の設定です」

幸人「次回、『キャラ紹介』でお会いしましょう!」

キャラ設定(前書き)

落花生「どうしてこうなった」

幸人「何が？」

落花生「いや、なんかキャラのセリフが乱れまくってるなって思ったんよ」

幸人「恨むならその文才ちからの無さを恨め」

落花生「かっこいいのになんかかっこわるく聴こえるんだけど」

キャラ設定

名前 真田幸人

外見 Fate／Zeroのアイリスフィールそのまま（性別が男のときは色々と出来たり無くなったりする）服は月読を真似て少し変えた白いボディーアーマーと鮮やかな紅の外套
属性 混沌・善

能力表 （全て制限状態、解除したら幸運以外EX）

筋力 A

耐久 B+

俊敏 A++

魔力 A-

幸運 C-

宝具 A+

能力

成長限界突破

あらゆるマンガやアニメの知識（努力次第で使える）
色々な才能（天才より少し下位）

病気や毒で死なない限定的な不老不死
???

アーティファクト

千変

幸人が天照に願ったモノの1つ。

能力は様々な武具に変わる（ただし1度に1つにしか変わらないが双剣等は別。性能はオリジナルと同じだが、特殊能力は無い。オリ

ジナルの武具も造れるが性能は製作者の籠める力に左右される）
名前の由来は色々な形になれるため。

幻想の存在しない世界に『発生した』幻想。人が『想い描く夢、在る筈の無いものを在って欲しいと願う』心。存在そのものが幻想であり幻想の『存在しない』世界における矛盾。人に願われるが世界には否定される存在。幻想を認めない世界に弾き出され死に至る。そこを別の世界の神である天照に助けられる。弾き出されたのは世界が日毎に増える幸人の存在^{幻想}を抑えられなくなった為。

キャラ設定（後書き）

落花生「新年！」

幸人「明けまして！」

月読「おめでとう！」

天照「ございまーっす!!」

落花生「とうとう、2011ですな」

幸人「そうだね、でもカウントダウン観ながらで0時0分に合わなかったけどね・・・」

天照「ほんとだね、実際ギリギリまで本文書いて出来たのがほんの新年5分前なもの」

月読「惜しかったね、あれ？幸人君の能力にわからない能力が？（幸人君の元に関わる事かい？）」

落花生「ああ、それはまた後々明かすんだよ（そう、幸人の存在の理由に関わるものだしまだ無理かな？）」

月読「楽しみにしてるよ」

幸人「ん？どうしたの？師匠」

月読「気にしないでいいよ、こっちの話だ」

幸人「そうですか」

月読「それより次回から恋姫の世界だろう？」

幸人「あ、そうですね！では次回『恋姫の世界に』です！お楽しみに！」

落花生「尚、ご意見、ご感想等々もしっかりお待ちしております！」

恋姫の世界に（前書き）

前書き 三話恋姫の世界に

落花生「はてさて、やっと恋姫編スタートできる」

幸人「君のせいでしょ、始まんなかったのは」

落花生「やかましいわ!! 転生してどうこうとか俺の頭じゃ出来なかったんじゃないあボケェ!!」

幸人「もっと酷いよ! 事情があつてならまだわかるけど単純に出来なかっただけ!？」

落花生「事情ならある!」

幸人「言ってみなさい」

落花生「どっかの誰かに要らんフラグ建築したs「アタアック!!」
ウボアアアア!!」

幸人「うわぁ、神速のドロップキック・・・」

天照「悪は消えたので本編をどうぞ♪」

幸人「いや、結局何も解決してないから。」

恋姫の世界に

S i d e 幸人

天照に別荘の中から転送されて恋姫の世界に飛んだは良いけど・・・

幸人「此処どこ？」

恋姫でよくある荒野じゃなければ此処は一体？ 「キヤアアアアアアアアア！」 む？何事？とりあえず行ってみましょか

なんだかんだで着きました。えっ移動時間はって？移動時間なんて唯の飾りです！偉い人にはそれがわからんのです！おっと、トリップしたようだ。・・・とにかく、目の前には黄色い布を体に巻いた10人程の男達に銀髪の女の子と緑髪の女の子が襲われそうになっているところだった。うん・・・助けなきゃ！

幸人「待ちなさい！」

おおう、どっかのヒーローみたいな感じだね

男A「ああ？なんだおめえ。」

男B「お前も混ぜて欲しいのか？」

男達「ギャハハハハ！！」「そんな訳無いだろうクズ共が」 ああ？

幸人「こんな女の子を襲うようなクズ共にやられたいと思う訳無いでしょう？ バカなの？ 死ぬの？」

相手を挑発する。その隙に千変を取り出す

男A「てめえ！」

男B「こっちが下手に出てりゃ調子に乗りやがって！！」

激昂した男達が剣を抜き襲いかかってくるだが・・・

幸人「甘い！！」

男達「ギャ・・・！」 「グハッ」 「やめっ・・・」

瞬時に千変をダブルセイバーの『ヴィヴィアン』に変え男達を切り刻む

銀髪の女の子「凄い・・・！」

男C「ヒイツ・・・く・・・来るなあ！」

緑髪の女の子「キャアッ」

銀髪の女の子「詠ちゃん！」

幸人「面倒な事を」

最後の1人が緑髪の女の子の首に剣を突きつける。はっきり言って無駄なんだけども・・・

幸人「仕方ないなあ」

私は男に向かって軽めに殺気を叩き込む。

男C「・・・！」

男にはそれでもきつかったようで手から剣を落として座り込む

緑髪の女の子「えっ？何？どういう事？」

銀髪の女の子「良かったあ詠ちゃん」

緑髪の女の子は突然起きたことに驚き、銀髪の女の子は緑髪の女の子の無事を安堵しているようだ。とりあえず千変を戻してっと、二人に此処がどこか聞かないとね。

幸人「大丈夫かい？」

銀髪の女の子「えっと・・・「ちよっと！あんた月に何する気！」駄目だよ詠ちゃん私達を助けてくれたんだよ？」

緑髪の女の子「だっていきなり出てきて助けるとか怪しすぎるわよ！こいつだって何するかわからないじゃない！」

幸人「とりあえず此処を離れないかな？ずっとこんな血生臭いところに可愛い女の子が2人も居るのもどうかと思うしさ、近くの邑にまで送るよ。」

二人「「可愛いって・・・／＼／＼」」

幸人「ん？どうしたんだい？」

二人「「なんでもないです！（わよ！）」」

どうしたんだろ？顔が赤いけど、怒らせちゃったかな？

幸人「そう、じゃあとりあえず君達の名前を覚えてくれないか？ずっと君って呼ぶのも何だしさ」

銀髪の女の子「私は董卓、字は仲穎、真名は月です」

緑髪の女の子「ボクは賈馱、真名は詠よ月を助けてもらったんだしボクも預けるわ」

幸人「ありがとう月、詠。私は真田幸人、姓が真田で名が幸人かな？字も真名も無いから幸人でいいよ」

月「では幸人さん、邑まで案内しますね」

詠「ちょっと待って月、幸人、あんたさっきの武器はどこに仕舞ったの？それにあの武器は何？」

幸人「ああ、これの事かい？」

千変を取り出しヴィヴィアンに変えると当然驚く2人

月「えっ？えっ？」

詠「珠が武器に！？・・・本当にあんた一体何者？」

幸人「うーん・・・そうだねえ、仙人でも妖でもないしなあ。あ、そうだ。今、大陸中に天の御遣いの噂ってある？」

月「えっ、あ・・・はい、有りますが・・・まさかあなたが御遣い様なんですか？」

詠「待って月、あの噂だと白く輝く服を着たのが天の御遣いなんだよ？こいつの白い鎧はどうみても輝いてないし「ちょっと待ってくれないか？」・・・何よ」

幸人「私は取り敢えず天の御遣いではないよ。でも御遣いと同種の人間ではある」

詠「どういことよ」

幸人「まず、噂の中に白い鎧と紅の外套を身に付けた者なんて無かったのでしょうか？」

詠「ええ、そうよ」

幸人「でも私はその天の御遣いと同じ世界から来たの」

月「え、えっと・・・」

詠「つまりあんたは天の御遣いでは無いけど天の御遣いと同じ知識と力を持っている訳ね？」

幸人「まあ、実際は両方私の方が上だろうけどね」

どのルートでも一刀君の武が役にたったとは思えないし、知識も原作を知っている私の方が上の筈

詠「なら、私達の・・・いえ、月に力を貸してくれない？」

あややや、まさかの董卓軍ルートですか、いや別に悪くないけどね。この2人は嫌いじゃないし、むしろ助けたい、でも劉備は嫌だ。赤い弓兵のことを知っているからこそあの思想には賛同できないし、他の三国の王と違って覚悟も無い。そんな奴に2人を預ける気にはならん。でもどうするかなあ。他の2国なら・・・呉の孫策かな？魏には人材マニア兼百合の曹操が居るし、大体軍師も3人も居るから問題ないだろう。呉は身内に害する者じゃなきゃ優しい方だと思うし、呉の人は好きな方だ。頼む時に洛陽から台帳と地図と玉璽でも持っていけば多分大丈夫だろう。孫策と周瑜の2人は頑張ればどうにか助けられる。毒矢は最悪喰らっても構わない。何故なら不老不死（限定的）はこの為でもあったからだ。これなら孫策の盾になって喰らっても死にはしない。周瑜の方は華陀の様に気を流して病を吹き飛ばせば問題ないだろう・・・よし、それでは行動開始なですよ。

（マルチタスクを使いここまでで0.2秒）

幸人「わかった、でも・・・」「な、なんですか？」ちよつとね、私の知っていることが面倒だからその対策と仕込みをしておきたいなと思って」

詠「知っていることってなんなの？」

幸人「（言っているのかなこういうの？まあ、いいか。私が来た時点で修正力も何も関係無いし）恐らく起こることだけど話し半分くらいに聞いてね？起こらないかもしれないから。」

そういつて既に始まっているであろう黄巾の乱と反董卓連合について話した2人は反董卓連合について驚いていた（詠は怒っていたが）当然の事だろう何もしていない寧ろ善政を行っていた筈なのに暴政を民に強いていると言われ攻められるのだ。詠の憤りは半端なものではない。

幸人「・・・だから、私は孫策のところに助けを求めようかと思うんだ」

詠「わかったわ、でも裏切らないでね？ボクは月を助けたいんだ。もし裏切ったら「約束するよ、そしてこれに誓うよ」なによこれ？」

私が作り出したのは1つの仮面。Bleachの一護が完全虚化する前まで着けていたもの。私の持つ能力の1つ。因みに虚化しての中に虚がないので虚にはならない、仮面は被る者の全ての能力を1.5倍にする。やはりこれもチートアイテムだと思う。

幸人「私の使う仮面かな？そこそこの強度もあるからお守りにでも・「怖くてできるわけないでしょ！」やっぱり？」

月「詠ちゃん、この人のこと信じてみようよ」

詠「それはボクも思うけど、こういう口約束って宛にならないじゃない」

幸人「大丈夫、私は2人を絶対助ける。2人の前に前に万の敵が居ても全部風ぎ払って2人を助け出すよ（ニコッ）」

2人「・・・／／／」

幸人「あれ？どうしたの？」

詠「あんた・・・それ告白みたいなものよ？わかってやってる？」

幸人「あれ？そうなの？そんなつもりは無いと思うんだけどなあ」

詠「まあ・・・いいわ。ボクと月はあるたを信じるから。絶対助けに来てね」

月「私も詠ちゃんのことよろしくお願いします」

幸人「もちろん！あ・・・でもまず2人をお城に帰さないかね。どっちの方向かな？」

私は月と詠の2人を抱え瞬動でお城に送り届けた。抱えた時に2人共顔が赤かったが余程恥ずかしかったのだろう、次から気を付ける事にする。

お城まで送った後、詠に孫策の拠点の方角を聞き瞬動で向かうことにした。

恋姫の世界に（後書き）

落花生「はい、第3話恋姫の世界に。どうでしたでしょうか？」

天照「ちょっと訊きたいんだけど？」

落花生「なに？」

天照「幸人の口調変わってない？」

落花生「それはアイリの顔と男の体が合わなさすぎて女の体を使ってるからだ」

月読「だから僕の口調を真似てるんだよ」

天照「そうなんだ、それにしても幸人・・・早速口説いてるなんてね♪」

落花生「本当は詠の方をこの回で惚れさせるつもりだったんだけどね。上手く話が作れなかったんよ・・・」

天照「ここが作者の限界ね♪」

落花生「いいさ、いいさあ！詠にフラグを立てるのは決まってることなんだよ！」

月読「どうして彼女なんだい？」

落花生「そんなものは俺が好きなキャラだからだよ！」

天照「ダメだこいつ、なんとかしないと」

月読「はい、じゃあとりあえず今回はここまでにしよう。次回も楽しんで！」

天照「ご意見、ご感想等もお待ちしております！」

百合と種馬と一羽の鳥 (前書き)

落花生「すいませんでしたあああああ!!」

天照「当たり前だよ♪」

月詠「一ヶ月も投稿しないなんて何があったんだい？」

落花生「それが…積みゲー状態だったテイルズオブヴェスペリアをやってて…しかも話が上手く書けなかったんです…ハイ」

天照「確かにヴェスペリアは面白いけどね♪」

月詠「でもアウトだよ」

落花生「え…ちょ…やめ…アツ——!!」

幸人「……………はい、取り敢えずですね、読んでくれていた皆様。本当に申し訳ありませんでした、早めに更新出来るよう頑張りたいと思います。未熟な作者ですが、これからも読んでいただけるとありがたいです」

天照「はい!ではでは作者への肅清も終わったところで、本編へと移りましょう♪」

月詠「今回の注意事項は、
・キャラ崩壊

・いつも通りの駄文

・無理矢理な感じの構成

・チート無双、です。

そういうのはちよつと…な方はブラウザで戻るを推奨します」

落花生「そ…それでもOKな方はそのままどうぞ…ガクッ」

幸人「第四話『百合と種馬と一羽の鳥』どうぞ」

百合と種馬と一羽の鳥

S i d e 幸人

？「貴女、私のものになりなさい」

どうも、幸人です。突然ですがピンチです。「どうしてこうなった」な状態です。魏の曹操さんに誘われています。とりあえずどうしてこうなったか振り返ってみましょう。

（回想開始）

ゾクッ

幸人「ッ！！？何？この嫌な予感。まるで金髪縦ロールで同性愛でドンマイな体型な少女に誘われた様な感じは！！？」

？『マスター、それほとんど誰かわかって言ってますん？というかわかってるでしょ。絶対特徴的に曹操さんのこと言ってますよね！』

私の右腕にはめられた腕輪から聴こえる声

幸人「気のせいだよ桜そして五月蠅いよ」

そう、今の今まで忘れられ只の一言も喋らなかつた腕輪型インテリジェントデバイス『桜』。この世界では魔法の使用は禁止されているのでハッキリ言つて只の喋る腕輪と化している。

因みに名前は F a t e 繋がりだが性格は作者の都合上別人だ

桜『すいませんマスター（なんか不愉快なコト言われたような…）』

幸人「きつとそうだよ…たぶん…」

桜「自分でたぶんって言つてたらもうほぼ確定だと思いますよマスター、此処曹操さんのいる陳留ですし」

幸人「ま…まあ、いいという事にしようよ。いざとなれば逃げれば良いんだし」

でも逃げたら逃げたで追ってくるんだよね…と思うと正直遭いたくない

桜「どっちにしろ反董卓連合の時に顔を会わせる羽目になるんですから諦めましょうよマスター」

幸人「しょうがない…か。ん！？…あれは」

かなり遠くだが街と街を囲むように黄色い塊が見える

幸人「嫌な予感しかないよ」

桜「軍の旗が確認出来ない所とあの黄色い布を考えると黄巾党と考えるのが正しいかと」

幸人「だよ。急ぐよ」

そう言うとは私は瞬動を使い町の前に辿り着く。黄巾党は後ろからいきなり来た私に気付かないまま目の前の町を攻めているようだ。

桜《マスター、彼らはまだ町の中に入っていないようです。どうやらバリケードを越えられないみたいです》

桜が念話で話しかけてくる。状況としては街の義勇軍が町の四方の門をバリケードで固め何か（恐らく官軍だろう）を待っていて、黄巾党は物量で四方の門を攻めるがバリケードが固くてなかなか入れない……と言ったところか

幸人《それなら……。桜、千変を関節剣幻光^{げんこう}に、一気に殲滅するよ》

桜
イエスマイマスター

両手にはめた指の出たグローブ（千変）を、白い刀身に真っ直ぐ赤い線の刻まれた細身の両刃剣に変える

「オイッ、なんだあいつ武器なんか持ってるぜ」

「随分といい女だな、武器も売ったら高そうだぜ」

「女は俺に譲れよ？俺が最初にやるんだ」

どうやら気付かれたようだ、まあ気配を隠しているわけでも無いし当たり前だろう。

それにしても不愉快な発言が目立つ……こいつらは自分の欲の為に賊になった口のようにだ……。ならば……！

幸人「容赦はしない！！真田幸人！推して参る！」

名乗りをあげて閃の刃節を伸ばし、敵に突っ込み

幸人「『渦状旋波』（かじょうせんは）！！」

名前はアレだが結局は唯の回転切りで数十人単位で吹き飛ばしていく

幸人「まだ！体勢を立て直す暇なんて与えない！」

直ぐにその場から駆け出し、走りながら閃を縦横無尽に振り回し敵を風ぎ払う。

敵の中央、一人だけ馬に乗り他の賊より豪華な物を身に付けている恐らく指揮官であろう男に狙いを定め敵軍を切り抜ける

「な…なんだあいつはア！！」

「お…落ち着きやがれてめえら！！相手は女一人だぞ！？全員で掛かれ！！」

やはり指揮していたのだろうその男は周囲の賊をまとめ私にぶつけてくる。だが…

幸人「無駄だ！『蒼破刃』！」

賊をまとめて横風ぎに一閃しその勢いで刃節を戻し蒼い剣圧を飛ばし指揮官を縦に切断する

「か、頭がやられたあ！！」

「逃げろォ！」

一目散に逃げていく黄巾党、だが逃がした後にまた同じことをしない保証は無い…。だから

幸人「逃がさない」

と一言呟き、閃の刃節を伸ばし、伸びた刀身に鋭く気の光を纏わせ、逃げ惑う賊の集団に全力で振るう…！

幸人「『巨龍ノ大爪』（きよりゆうのたいそう）」

極光と共に斬と振るわれた後には数十mの爪跡と赤く染まった地面、後は賊だったものだけだ

幸人「悪いけど街の人に被害を出すわけにはいかなかった。許してほしいなんて言わない。怨みたいなら怨んでもいい。でも、お前たちはちよつとやりすぎだよ」

桜「マスター、どうやら他の門に居る黄巾党は官軍により全滅したようです。」

全滅した事を聞き幻光（関節剣）を千変にグループ戻す

幸人「そっか、じゃあ厄介事に巻き込m「待ってください！」「ちよつと待ってくれないか」遅かったか…」

銀髪三つ編みの女の子と青髪の女性が駆け寄ってくる。ああ、なんか嫌な予感。でも聞くだけ聞いてみようか。

幸人「何ですか？」

銀髪の子「貴女様のお陰で助かりました、ありがとうございます」

幸人「気にすることじゃないよ、たまたま見えたただけだし。それに官軍が居たんだし私が居なくても問題無いと思うけど？」

そうでしょう？とでも言うように青髪の人に言う

青髪の人「華琳様に姉者も居るのだ。確かにそうかもしれないが前のお陰で兵達の被害も少なかった。ありがとう」

幸人「まあ、被害が少なくて良かったじゃない…えーっと？」

夏侯淵「陳留曹操軍の将夏侯淵だ」

楽進「姓は楽、名は進、字は文謙。真名は侃です」

おお、真名教えられちゃったよ…どうしよう。今は味方だけど黄巾党のことが終わったら敵だしなあ。でも楽進ちゃん可愛いよねえ、忠犬って言葉がとっても似合うと思うんだ。

幸人「ありがとう夏侯淵さん、楽進は…いいのかい？こんなよくわからない奴に真名を教えて」

楽進「構いません、義勇軍の皆を助けてもらったのですから」

仕方ないか……ん？あれはまさか…？

幸人「そう…わかったよ、ありがとう。私は真田幸人、姓は真田、名は幸人になるのかな？字と真名は無いから好きに呼んでくれていいよ」

夏候淵「ああ、ならば真田、一つ訊きたいのだが」

幸人「何かな？」

夏候淵「真田の名は我等の下に居る天の御遣いと似ている様に思うのだが何か関係はあるのか？」

幸人「ああ、そう言えば此処に天の御遣いが来たんでしたね。そう、私もその御遣い君と同じ所から来たと思うよ」

夏候淵「そうなのか！？……ふむ…ならば真田の事も管輅の占いに
出ているのではないか？」

凧「そうですね、真田様程の力を持っていれば名が出るのでは
ありませんか？」

幸人「出ないと思うよ、だって「しゅーーらあーーん！！」……
…。」

なんか黒髪で赤くてスリットの深いチャイナドレスを着た女性（恐らく見た感じからして夏候惇だろう）が猛スピードで走ってくる

夏候淵「…済まないな真田。どうしたんだ姉者」

夏候惇「おお、秋蘭。華琳様が呼んでいたぞ。楽進、お前もだ」

凧「わ、私ですか？」

夏候惇「そうだ、他の二人も既に来ているぞ。…でお前は誰だ？」

幸人「私かい？」

夏候惇「他に誰がいる！義勇軍にも我らの仲間でもない…もしやお前さっきの賊の仲間か！？」

いきなり抜刀し、斬りかかってくる夏候惇、なんでそうなるの！？

桜《マスター！》

幸人《わかってるよ！！》

グローブを刀身から柄の先についた鎖まで全てが黒い日本刀…某少年誌のオレンジ髪の死神が使う刀、天鎖斬月に変える。夏候淵さんと凧ちゃんは驚いているようだね、夏候惇は一瞬驚いたけど先手必勝とでもやりたいのか構わず降り下ろしてくる。…でもね…？

幸人「遅いよ」

夏候惇の大剣が私の頭をとらえるより速く私は大剣を天鎖斬月で弾き飛ばし夏候惇の鳩尾に拳を叩き込み気絶させる

夏候惇「がっ……………?!」

幸人「ごめんね？でも私は賊じゃない、私は旅の途中にたまたま見かけたから来ただけ。」

そう言って天鎖斬月を下ろし元のグローブに戻すと、私に殺意が無いとわかったのか夏候淵さんが声をかけてくる。

夏候淵「真田すまない、姉者がいきなり…」

幸人「ああ、気にしないでいいよ、というかごめんね？お姉さんに普通に反撃しちゃったし」

夏候淵「いや、それは仕方ないとも言えるだろう姉者が真田の話を聴かずに斬りかかったのだからな」

？「そうね、確かに今のは春蘭が悪いわ」

こ…この声は！【文章だから声なんてわからんでしょう…なんてツッコミは無しでお願いします】

…ん？なんか宇宙意思的なものが…？まあ、いいか。そんなことは置いてくとして、やっぱり来ちゃったか…

幸人「そうだと私の気は楽になるんですけどねえ…。そうでしょう？曹猛徳さん？」

金髪クルクル百合少女降臨…って感じかな？

やっぱり勧誘されるかなあ…夏候惇倒しちゃったしなあ…此处に居た賊も一人でほぼ殲滅しちゃったしなあ…

曹操「あら、どうして私が曹操だと思ったのかしら？」

いや…訊いてくるのはいいけどね…？

幸人「それだけの覇気を持って尚且つ夏侯惇、夏侯淵の二人が居ればまず曹操だと思いませんか？」

曹操「もしかしたらこっちの男が曹操だったかもしれないじゃない？」

そう言って隣に居た白い制服を着た少年の方に目を向ける。ああ、天の御遣い君ですね。確かに王になる器はあるかもだけど…

幸人「ありえないですね、彼と貴女では格の差というのがはつきりと感じ取れます。曹操が無能であるならそれも成り立ちますが違うのでしょうか？」

曹操「ええ、そうね。確かに私が曹猛徳よ、でも貴女だけが私の事を知っているのは少しずるくないかしら？」

幸人「それもそうだね。私は真田幸人、夏侯淵さんと風ちゃんには既に言っているが其処の彼、北郷一刀君と同じところから来た乱入者だよ」

流石に実質二人めの天の御遣いに曹操も御遣い君も驚いているようだ。ますます嫌な予感が…

北郷「えっ?! 君も俺と同じところから? 君はどうやって来たんだ?」

御遣い君がなんか色々と言きながら私に詰め寄ってくる。…正直来ないでほしい、原作をやった私からすればこいつは唯の変態にしか見えないのだ。元はエロゲだと理解はしている…がそれでもダメだ、直接会ってみてそうなる事実を知っているせいか体が危険だと信号

を発しまくっている。

幸人「いや、御遣い君此方に来ないでくれなにか？失礼とは思っているのだがなんか君は生理的にダメだ。受け付けない」

私の言葉に御遣い君はorzな状態になり周りに居た方々は全員笑いを堪えていた

北郷「生理的にって……生理的にって……orz」

凧「真田様……くくっ……ちょっと酷くないですか？」

曹操「ふふっ……そうね……確かに少し酷いわね」

閑話休題【使ってみたかったただけだ、後悔はしていない】

また宇宙意思が出たような……まあいいさ、それはさておき

幸人「とりあえず此方の事情はわかっていただけましたか？」

曹操「ええ、わかったわ。貴女は旅の途中でたまたま見掛けて戦闘に参加し、尚且つ一人で賊の一部隊すべてを倒した。秋蘭と凧は貴女の武勇を見て礼と話を聞きに来た。其処を春蘭が貴女を賊と勘違いをして襲いそれを貴女は撃退した……と」

かいつまんな説明ありがとうございます。でも言い終わると同時にニヤツとするのはどうかと思いますよ？あれですか？人材マニアの血が騒ぐんですか？

幸人「ええ、そんな感じです」

曹操「真田幸人」

幸人「：何です？」

曹操「貴女、私のものになりなさい」

（回想終了）

うん、そうだったね。思い出したよ【今の今まで回想してた事も思い出したよ】ちよっと、宇宙意思！？それ大事な事じゃないの？！

……げふんげふん。気をとりなおして…と、さてどうしようか、取り敢えず逃げなきゃね、月と詠を助ける為に孫策さんの所に行かなきゃいけないんだし。……まあ、曹操さんでもいいんだけど……百合だしなあ……しかも変態の御遣い君が居るからねえ……。百合はまだどうにでもなるんだけどなあ……御遣い君はどうしようも無いだろうしなあ………うん、魏は止めよう。

因みに蜀という選択肢は最初から無いです。劉備のような考えは嫌いじゃないけど夢を見すぎだと思うのですよ。皆仲良くが通ったら戦争なんて起きません。夢を見る人は嫌いじゃありません、寧ろ好きですがしかし現実を見ない人は嫌いですね。

……考えがそれましたね。さて…逃げますか……。

幸人「すみませんがお断り致します」

曹操「どうしてかしら？ 貴女は旅をしているのでしょうか？ 断る理由は無いと思うわよ？ それに春蘭を倒す程の力、私が逃すと思ってる？」

幸人「貴女のような方ならなおさら逃がさないでしょうねえ。ですが私は御遣い君の毒牙に掛かりたくないのですね。しかも旅と言っても目的はありますので。それでダメなら面倒なので実力行使で逃げます」

曹操「流石に貴女を捕まえられる余裕は『今は』無いわね」

幸人「あくまで今は…ですか」

曹操「ええ、そうよ。私は欲しいと思ったものを諦めることはしないの。だから貴女も必ず私のものにして見せるわ」

幸人「おお、怖い怖い。でもまあ『今は』大丈夫のようですからね
安心しましたよ」

曹操「ええ、今は…ね？」

私と曹操さんの間で視線がぶつけながらフッフ…と笑う。その雰囲気
に御遣い君、夏侯淵さん、風ちゃんは近寄れない。

夏侯淵「か…華琳様」

夏侯淵さんが勇気を出して曹操さんに話しかける

曹操「何かしら？秋蘭」

視線は逸れ、先程の雰囲気は消える。

夏侯淵「そろそろ城に戻った方が宜しいかと」

曹操「……そうね、もう此処に用は無いわ。幸人」

不意に曹操さんが声を掛けてくる

幸人「何です？曹操さん「華琳よ」どうして真名を？」

わかる気がするが一応聞く

華琳「だって遅かれ早かれ貴女は私のものにする、ならば先に真名を預けておいても問題ないでしょう？」

幸人「理由が少々アレですが預からせて貰いましょう。華琳さん？」

華琳「なら幸人、また会いましょう？」

不敵な笑みを浮かべ華琳さん、御遣い君、夏侯淵さんが去っていく

幸人「全く面倒な相手に狙われましたねえ」

溜め息しかでない。あのタイプはかなりしつこいんだよね…

凧「真田様…大変ですね」

幸人「そうだね……」

凧「あの…一つ訊いても構いませんか？」

幸人「ん？何かな？」

凧「真田様は何故あれほどまで強いのですか？」

幸人「それは…うーん……」

どう説明しよう、全然浮かばない

桜『マスター、どうせなら全部教えて引き込んでみませんか？』

出番の無かった桜が念話で話し掛けてくる

桜『失礼なこと考えてませんか？』

幸人『ソナナコトナイヨ』

桜『そうですか…』

幸人『そんなのは良いとして凧ちゃん引き込んで大丈夫なの？まあ…味方に出来るならしたいけど』

桜『なら、引き込んだじゃいましょう♪』

ま、やるだけやってみますか。当たれば味方に、外れても華琳さんへの牽制位になるかな？

【因みにこの間一秒位】

幸人「そうだねえ、じゃあ取り敢えず説明する事をしっかり聞いてね？」

凧「はい！」

気合いは十分みたいだねえ

幸人「じゃあ私が此処n「ちよつとまったあ！」この声は…まさか」

私の背後から光が放たれる。…マジですか

天照「私…：…参上!!！」

某最初から最後までクライマックスなライダーと同じポーズを決め、外見イリヤの太陽神が現れた

百合と種馬と一羽の鳥（後書き）

幸人「なにこの終わり」

天照「まさかの途中で切るとか」

落花生「かなり努力した、だがこうなった。反省も後悔もしてる」

天照「ライダーネタで落ち、しかも端から見たら唯のイタイ子だよ……」

落花生「一ヶ月の大遅刻＋この駄文は自分でも無いわ」

幸人「……さて、次回は風ちゃんに天照からの色んな説明フェイズと風ちゃんをどうするか……というお話です」

天照「質問、意見、御感想はいつでも募集中です。」

落花生「次回も出来れば見てください！」

幸人「それでは」

三人「アリーヴェデルチ!!!」

お知らせ

読者の皆様、突然ではありますが「俺と神と異世界旅行」の連載を中止させていただこうと思っております。

理由としては私の作りの甘さと技量不足ということです。曖昧な構想のまま続けて読者様に不快になるようなものを見せても仕方ないと思ったからです。

このような勝手な理由ではありますが俺と神と異世界旅行を中止させていただきます。大変申し訳ありませんでした。

しばらくしたらということになりますが現在新しい話の構想を練っております。原作は東方で大昔からのスタートという感じになります。

いきなりやめた直後に何を言っているのかと思いますが微笑ましく温かい目で見えていただけるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7287p/>

俺と神様と異世界旅行記

2011年10月8日12時50分発行